氏　名（本籍地）	関　悠倫（青森県）
学　位　の　種　類	博士（文学）
報告・学位記番号	乙第 227 号（乙（文）第 93 号）
学位記授与の日付	2022 年 10 月 24 日
学位記授与の要件	本学学位規程第 3 条第 2 項該当
学 位 論 文 題 目	『釈摩訶衍論』の研究　―その成立と思想―
論 文 審 査 委 員	主査　教授　博士（文学）　渡辺　章悟
	副査　教授　伊吹　敦
	副査　教授　博士（文学）　橋本　泰元
	副査　本学非常勤講師/専修大学元教授
	博士（文学）　佐藤　厚

関悠倫　学位論文審査結果報告書（乙）

主査：渡辺章悟

【本論文の位置づけ】

本論文「『釈摩訶衍論』の研究　―その成立と思想―」は『大乗起信論』の註釈である「『釈摩訶衍論』について、総合的に研究した論文である。

そもそも『大乗起信論』は、大乗とはなにかということを、理論と実践の両面から、唯心論の立場で簡潔に論述した作品で、インドの仏教詩人アシュバゴーシャ（馬鳴 2 世紀）作とされる。しかし、この作品はインド仏教では全く知られていないことから、おそらく 5～6 世紀頃に中国で多くの文献を蒐集して編纂されたと考えられている。この『大乗起信論』には東アジアで非常に多くの註釈が書かれ、極めて重要な論書とされている。

この『大乗起信論』に対する注釈が『釈摩訶衍論』であるが、本論の研究はこれまであまり進展していなかった。この『釈摩訶衍論』の「摩訶衍」とは、大乗（mahāyāna）の音訳であり、その注釈ということから「釈摩訶衍」と題している。本書は『大乗起信論』の註釈でありながら、きわめて多くの経論を引用しながら注釈を施し、ある種の独立した大乗仏教概説という面を有している。しかし、その文章が難渋であり、他の『大乗起信論』注釈には見られない独特の思想を説いていることや、その文体も独特の性格を持つことから、理解が困難であり、これまで手がける研究者は少なかった。しかし、近年『大乗起信論』との関連で、日本の研究者を中心として、様々な視点から研究が進められつつある。本申請者関悠倫氏はそのうちの有力な一人である。

本書『釈摩訶衍論』（以下『釈論』と略す）は、龍樹菩薩造、筏提摩多三蔵訳と伝えられる。龍樹菩薩とは、２世紀から３世紀に活躍したインド仏教最大の学匠である龍樹（150―250(頃))のことであるが、実際には『釈論』は、８世紀の前半に中国仏教圏で、華厳教学などを背景として成立したと考えられてきた。わが国では真言宗の祖である弘法大師空海が、この論の中の密教的な要素に注目し、真言密教教学を確立するための論拠として用いたために、後代の真言学徒によって重視され、研究されてきた。実際に明治時代までに書かれた『釈論』の注釈は数百を超えるとされ、そのほとんどが真言宗の学匠によるものである。

関氏も真言宗に属する研究者であるが、本研究論文はこれまでの研究に対し、格段に広い視点で『釈論』が依拠したと思われる多くの大乗経論を検討しながら、正面から『釈摩訶衍論』の成立とその思想に挑んだ本格的な学術論文である。関氏はこれまで『釈論』に関する二十点ほどの論文を公刊してきたが、本論文はそれらの論文を基礎に新たに書き直し、編纂したものである。

本論文は全 372 頁（一頁 1600 字）で、以下のような四部構成からなる。

〇序論

〇第一編「『釈摩訶衍論』の成立史的研究」

○第二編「『釈摩訶衍論』の基礎的研究　―「三十三法門」を中心として―」
○第三編「『釈摩訶衍論』研究における新視点の呈示」

【論文の構成とその内容の分析】

まず序論にて『釈論』に関する諸資料の整理を行い、テキスト・書き下し・現代語訳の状況を網羅する。次いで中国と日本の注釈文献を概観し、その特徴を摘出している。さらにこれまでの研究を概観し、『釈論』の成立地・成立年代、その根拠などを一覧しつつ、その問題点を摘出する。これらは非常に詳細で網羅的に行われているビブリオグラフィーであり、資料的価値が高い。特に先行研究を扱う際、これまで日本の学会では取り上げられてこなかった韓国の研究論文を参照していることも評価できる。

ついで、『釈論』の構成としての「三十三法門」に着目し、五つの視点から従来の研究成果を分類し、そのトピックと問題点をあきらかにしている。このような総合的分類も関氏独自のものであり、便宜的ではあるが『釈論』の本質を理解するのに有効である。序論の最後に、本論文の大綱がまとめてあり、懇切丁寧に、本論文の構成とその内容がスケッチされている。まずはこの個所を読むことによって、本論文の意図がほぼ汲み取れる。

第一編・第一章は、『釈論』の成立について、同論が受容された状況を経録・目録・文書や碑文などを参考にしながら、アウトラインを描く。いわば書誌学的研究を中心とした記述である。ここで取り扱う資料は成立が明確な中国撰述の五種類、日本の祖師の入唐目録や官符の五種類、計十種類を取り上げる。これらの分析によって、従来の中国・日本で『釈論』がどのように位置づけられてきたのかがよく判る。特に、中国では龍樹の真撰説がとられた。一方、日本において真言系は龍樹真撰説の立場、それ以外の天台や法相では偽撰の立場とする。特に天台側は、作者を新羅僧月忠の妄造とする点などが指摘されている。

ただし、「釈論の偽撰論者が日本国外で有力な説を得られなかったので、新たな有力と見える説を主張するため、日本にいる新羅出身の僧侶の説として紹介したのではないかと考える」と述べているが、これはもう少し根拠が必要であろう。

第二章は、『釈論』の日本に伝えられた時期、その直後におこった真偽論争、特に淡海三船による偽撰説を中心とした伝説の検証を中心に論じている。具体的には、『釈論』が戒明によってわが国にもたらされた際、淡海三船と最澄によって『釈論』偽撰説が唱えられたことを紹介する。まず『釈論』を偽撰と判定したのは賢撰とする説があること、三船の論難は資料に不明な部分が確認できるため再考の余地があること、天台側が『釈論』作者を新羅の月智（知）あるいは月忠とする説について批判的に疑問を述べている。また、関氏は、「現段階では」と限定しながら、「日本国内の何者かが＜新羅珍聡口説月忠（知・智）＞説を創作し、新羅出身者に仮託した」とし、それは天台宗の安然を発信源としていると推定する。

第三章「『釈摩訶衍論』の成立と武則天」では、関氏は『釈論』の成立事情についていく

つかの重要な指摘をしている。一つは石山寺本の調査から、そこに則天文字も依用されていること、ならびに 1 行 32 文字という武則天時代の規則が、写経規格にある文字数と一致すること、また『釈論』の序文は武則天が手掛けた『八十華厳』の序を模倣して書かれており、内容状上も彼女が推し進めた特有の弥勒信仰を予想させる叙述が確認できること、これらのことから、『釈論』の成立時期を七世紀後半から八世紀初めにかけて、中国において製作された可能性が高いことを主張する。

特にこの中で、『八十華厳』の序文と『釈論』序文との類似性を指摘しているのは関氏が指摘した新しい学説として高く評価できる。ただし、菩提流志訳『宝雨経』と『釈論』序文との類似性については、もっと明確な論拠が必要であろう。

第四章は、『釈論』で説かれる「六馬鳴」説の謎について分析する。本章では、授記と法滅思想に基き、馬鳴が六度この世に出現することを述べるが、その背景に法滅という時代観念があるという。法滅にこそ新たな馬鳴が出現するがそのことを龍樹に仮託された『釈論』の著者が知っていて、このような転生の構想を述べたのであろうとしている。確かにこの関氏の説は斬新であるが、やや強引で説得力に乏しい点もある。

第五章は、四章に引き続き、『般若経』等の大乗経典が『釈論』に影響を与えていることを検証し、従来の『華厳経』の影響下で成立したという学説を批判する。

第六章は、『釈論』が初期あるいは中期密教の思想的要素を含んでいることを、「隠密」や「総持」など後の使用法から考察する。『釈論』には架空経典が多く引用されるが、それには密教的要素をもった経典がある。そのうち『隠密経』と『総持経』という二種の架空経典を検討し、これらが初期密教を想定した経典であると分析している。本論文では、さらに三十三法門に対して顕密思想を当てはめ、三十二法門が顕教、不二摩訶衍法が密教という理解を示し、『釈論』に密教思想の読み込みを行う。この分析は関氏に特有の分析である。

第七章では、『釈論』の遼代の流通について先行研究を批判的に検討している。特に房山石経の記述と周辺事情から、朝鮮王朝との交流を精査し、「契丹大蔵経」から 13 世紀の「高麗大蔵経」再雕版の編纂時に『釈論』が取り入れられたことを指摘する。そして、『釈論』が受容された地域は中国圏内に集中していることから、改めて『釈論』が中国成立であるとしながら、その変体漢文の分析から、朝鮮半島出身の僧が中国に留学し、そこで様々な教学を学びながら『釈論』を造論したと推定している。

ただし、遼はモンゴル族の一種の契丹族の建てた国であるから、中国圏内と一括して論ぜず、もう少し細かな論述が求められる。また、『釈論』の朝鮮半島成立説に反論するのはよいが、せめて「作者は朝鮮半島出身者の可能性は高いが、その成立は朝鮮半島に限定せず、中国の可能性も想定すべきである」程度にとどめておくべきであろう。

第二編「『釈摩訶衍論』における「三十三法門」」は、『釈摩訶衍論』が『大乗起信論』の注釈書として、どのような構想により「三十三法門」として構築されたのか、『大乗起信論』の体系である「摩訶衍」・「一心」・「二門」・「三大」の解釈を分析したもので、『釈論』の思想内容を扱っている。

第一章は、『大乗起信論』立義分の内容を考察しつつ、『釈論』以外の主要な注釈書三種、『大乗起信論義疏』（以下『義疏』）・『起信論論疏』（以下『論疏』）・『大乗起信論義記』（以下『義記』）を用いて、「立義分」の「摩訶衍」・「衆生心」・「二門」・「三大」の解釈を整理している。

第二章は、「三十三法門」の検討を行っている。まず「立義分」について大乗の根幹をなす法を、あらゆる願いを叶える不思議な珠、すなわち衆生を利益すること限りない仏や仏説の象徴である如意宝珠と捉え、三十三法門の構造を想定した説を展開している。そして利根の者に開示された章が立義分だと表明しているが、これは『義疏』が立義分を上根の為に説かれた説であることを応用したものと考えられる。

「摩訶衍」の解釈は、『釈論』では、摩訶衍＝大乗の意味があらゆるものを包含する大きな器と喩えて、区分できない最高の大乗の教え（不二摩訶衍法）とする。このような理解は注釈書三種にはない。「衆生心」の解釈は、卵・胎・湿・化・声聞・縁覚・菩薩・如来の計八種の修行者がこれに含まれると説く。これも、『釈論』以外の注釈書三種にはない説であるという。その他、衆生を凡聖の二種に分類する解釈、真如門は出世間法である一切真如法、生滅門は世間法である一切生滅門法であって、染浄の観点から法の属性を「二門」と解釈する。そのような理解もまた『釈論』独自の解釈である。

そして、自体相用については、自体・自相・自用と三分類していることや、二門両方に「三大」を認める解釈など、他の注釈書三種には認められない『釈論』特有の思想について言及している。これは重要な指摘であり、順当な理解であろう。

第三章は、「解釈分」を中心に「真如門」と「生滅門」解釈するものである。関氏はこの章で、本覚や始覚、言説、心量、名字等について、二門の属性に対応させて配当している。特に、方便によって迷いのなかにいる衆生を済度する生滅門と、真理を説くことができる言説によって聖者を解脱させる真如門という二面の言説観や修行者観があると分析する。

そして、このように二元的に分類する傾向は教説も『釈論』以外の注釈書にはなく、言説等に対する積極的な言及も存在しないことが特徴であるという。

第四章は、「不二摩訶衍法」の基礎的検討である。ここでは五種類のテーマで行われる「五重問答」と、「迴向頌の解釈」も、『起信論』由来の本覚をテーマとしているが、その問答体での表現は、三十三法門が基盤となっている。なお、「迴向頌の解釈」は、三十三法門の構造を再説したものである。しかし、迴向頌の一節である「迴此功徳如法性」の『釈論』の解釈を分析すると、「如」は真如であり二門、「法」は一心法であり衆生心、「性」は本覚であり三大、と結ばれる。これらの教説も『釈論』の独自性であるという。

第五章は、「三十三法門」の問題点を「機根論」・「因中果説」・「如義言説」の三点から分析している。最後の「如義言説」とは、教主である仏の説法を想定した言語である。つまり、不二摩訶衍法の世界を言説によって表現できるのは如義言説しかないとする言語観が述べられている。また、三十三法門とは、同論全体の中心思想であることは勿論、あらゆる修行者を対象とした修行道論となっている。このような設定が読み込まれるという点に関氏の

『釈論』解釈の的確な視点がみられる。

第三編は「『釈摩訶衍論』研究における新視点の呈示」であり、『釈摩訶衍論』の馬鳴観に基づく「授記や法滅思想」より始まり、真言密教との関連性までを視野に入れて、検討したものとなっている。本編には他の研究者には見られない関氏の幅の広い視点からの研究成果が見られる。

第一章は、「衆生心」解釈をもとに「如来」とは何かを検討している。「如来」は修行者であり厳密には真如門に対応する者であるという。そしてこの仏身とは華厳の教主である毘盧遮那仏を意識したものであるというが、この結論自体は特に新しいものではない。ただ、毘盧遮那仏を修行の行果が報われた報身であること、その理由に如来を「不二摩訶衍法」より下位に位置づけようとしたと推定している。この指摘は通常は考えがたいが、『釈論』という独特な論書の思想として注目すべきであろう。

第二章は、「金剛喩定」の分析である。金剛喩定とは、悟りの直前に一瞬経過する金剛（最高に堅固な鉱物）に譬えられる禅定のことであるが、『釈論』にはこれに、方便として説かれる「方便金剛」と金剛喩定そのものである「正体金剛」という二種あることを指摘する。さらに、金剛喩定の行者とは、実は十地の菩薩のことであり、それを〔原〕因円満者とし、如来を〔結〕果円満者と位置づける。また、金剛喩定とそれによって得られる智慧を「尽智以前の智」と「尽智」に二分しながら、さらに次の段階である無生智を措定し、それを持つものこそが如来であるとする。

このように関氏は、金剛喩定とそこで得られる智慧を細分しながら、修行の階梯を解明し、これらの教説が『般若経』等の智慧の教説を踏襲していることを指摘する。そして、二種の喩定説は三十三法門という『釈論』の行位論と体系的に結びついているとする。このような解釈は関氏の新たに解明したもので、『釈論』解釈の独創的な見解と言って良い。

さらに、『般若経』の「三智」や「如実智」という悟りに直結する知の使用例を中心に、『釈論』が般若経の影響下にあることを論じているが、これは従来『釈論』が『華厳経』の思想的影響下にあるとする定説に再検討を加えるもので、本論文でも重要な学説の提示であると評価する。

第三章は、仏身観の考察である。具体的には『釈論』は、『起信論』所説の法身・報身・応身の三身説を踏襲せず、法身・応身・化身の三身説を唱えているとされていたが、関氏はこれに対して、『釈論』の仏身観には、三身説では説明できない面があり、「不二摩訶衍法」を法身として見ると、「三十二法門」のうちの「生滅門」には応身と化身が対応し、「真如門」には報身が対応する。このように『釈論』には三身説ではなく四身説が説かれているとする。この点は示唆的ではあるが、部分的な検証に留まるもので、さらなる例証が必要であろう。

第四章は、『釈論』と『大智度論』との関係を、同じ龍樹を作者名とする点から分析している。特に『釈論』と『大智度論』の翻訳年代、造論の目的の共通性、さらに、『大智度論』序文にある馬鳴と龍樹の関係も両論の影響関係を示唆するものであるという。

最後に総括が述べられている。ここでは『釈摩訶衍論』が大乗仏教綱要書として作成されたという構想を述べている。本論文でこれまで検討されてきたように、『釈論』の特性は、三十三法門という構造とその中心思想が柱となっている。三十三法門を説法する目的は、一切衆生を成仏、解脱させるために説いたと言える。

その観点から『釈論』を再評価すると、龍樹に仮託された『釈論』の作者は、『大乗起信論』を註釈すると言うより、『大乗起信論』を素材としながら密教的視座を立脚点としつつ、独自な修行道論の体系と成仏理論を提示しようとしたという。そのために多種多様な思想を総摂したあらたな大乗仏教綱要書を目指したのではないかと述べている。この結論は、従来の『釈論』研究の多くの論文を超えた新たな領域に達しているものと評価できる。

【結論】

以上の点から、本論文は従来の真言教学からの研究とは一線を画す本格的な仏教学の論攷と言って良いだろう。ただし、まだ不十分な点もある。

全体にわたり著者は、『釈論』が仏教学的に価値ある論書であることを前提として論を組み立てている。しかし『釈論』の教説には仏教学の常識では理解できない荒唐無稽な内容が含まれており、正統な論書であるとはみなされなかった伝統もある。中国で『釈論』を引用する華厳の宗密が、六馬鳴説など限定した内容でしか『釈論』を引用しなかったのは、それを物語るのではないだろうか。

さらに、関氏がいうように『釈論』が価値ある論書であるとされるようになったのは、日本の空海や、中国遼代の注釈以後であろう。そして、それらは『釈論』を解釈する側が自己の観点から読み込むことにより、価値ある論書として扱われるようになったと思われる。この点から関氏も、『釈論』が価値ある論書と見る伝統の中で思考している。しかし、より客観的な論文となるためには、『釈論』の価値について、価値ありと見る立場、価値のないものと見る立場を平等にとらえ、その主張を語らせた上で、著者の判断である、価値あるものとする見解を明らかにしていくことが望ましい。また、上記の評価の中で指摘したように、ところどころに論理の飛躍がある点など、論旨が不明確な叙述も散見される。

しかし、総合的に見て本論文は、難解で知られる著作に正面から取り組み、十分な調査に基づいた上で、創造的な学説を提示した、高いレベルの学術的な論文であり、文学研究科（インド哲学仏教学専攻）の博士学位審査基準に照らしても妥当な研究内容であると認められる。したがって、本審査委員会は、関悠倫氏の博士学位請求論文について、所定の試験結果と上述の論文審査結果に基づき、全員一致をもって本学博士（文学）の学位を授与するにふさわしい論文であると判断した。

序論

第一章　研究の前提　―『釈摩訶衍論』の概要―

第二章　研究の回顧

第三章　課題の整理
第四章　本論文の大綱
第一編　『釈摩訶衍論』の成立に関する諸問題
第一章　仏教論書・経録・目録・官符に見られる『釈摩訶衍論』の記述
第二章　『釈摩訶衍論』日本請来時における二、三の問題
第三章　『釈摩訶衍論』の成立と武則天　―新羅華厳との関係の再考―
第四章　「六馬鳴」説の背景　―法滅句と授記思想との接点―
第五章　般若経典との接点　―「三智」等の智慧に対する理解―
第六章　密教的要素の検討　―「隠密」と「総持」を中心に―
第七章　『釈摩訶衍論』の遼代における流通
―道宗とその周辺における受容の傾向を中心に―
結論
第二編　『釈摩訶衍論』における「三十三法門」
第一章　『大乗起信論』「立義分」に対する三種注釈書の解釈
第二章　「三十三法門」の検討
第三章　「真如門」と「生滅門」解釈　―「解釈分」解釈を中心に―
第四章　「不二摩訶衍法」の基礎的検討
―『大乗起信論』の体系・「三十三法門」の構造との比較―
第五章　「三十三法門」の問題点の検討
結論
第三編　『釈摩訶衍論』研究における新視点の呈示
第一章　「衆生心」解釈に登場する「如来」とは何者か
第二章　「方便」・「正体」という二種の「金剛喩定」について
第三章　仏身観の一考察　―四種身説の可能性―
第四章　『釈摩訶衍論』を造論した意図　―『大智度論』との関係を中心に―
結論
総結